

# 一九三七年の朝鮮・満洲視察旅行

一九三七（昭和一二）年七月三日から八月二日まで、桜岡尋常高等小学校校長安室晋治は、寿尋常高等小学校長蓑島兵蔵、北方尋常高等小学校校長高橋林造と共に、朝鮮・満洲へ視察旅行に赴いている。安室晋治は、この視察についてノートを用意し、若干のメモと、紹介状としての名刺類、鉄道の食堂車案内やホテルのタグや記念写真などを貼付している（安室吉弥家資料一・二四）。この他、視察前や視察中に手に入れたと思われる各地の案内パンフレット類や絵葉書なども残している。教育機関への視察が主な目的であるが、このノートでは詳細は分からない。そ



写真1 桜岡小教職員 視察の次年度1939年2月撮影 中央が校長の安室晋治 (安室吉弥家資料No.245)

こで主に行程を中心にこの視察を紹介する。

まず、安室晋治について簡単に紹介しよう。

現磯子区の旧家に生まれ、神奈川県立第一中学校を卒業し、神奈川県師範学校へと進み、一九一四（大正三）年卒業後、金沢小・森中原小の訓導を経て、二一（大正一〇）年日下

小の校長となり、翌二二年、後の桜岡小となる大岡川小の校長となった。その後、二七（昭和二）年大岡川村の横浜市編入による桜岡小への名称変更、四一（昭和一六）年桜岡国民学校への変更後、四二年八月までの約二〇年間の長きにわたって校長を勤めている。

この安室晋治に関わるさまざまな資料や、近現代の地域資料など二〇〇〇件を超える資料が、横浜市史Ⅱの編集過程において、安室家から横浜市に寄贈されている。現在は、市史資料室が所蔵・公開をしている（『横浜市史資料所在目録 近現代』第9集参照）。

## 市の初等教育者海外視察

横浜市では、一九二〇（大正九）年から初等教育者の海外視察を始めている。これは「他の諸都市に率先し」たものであった（『大正十四年度 欧米教育状況視察報告書』横浜市役所）。初回は、本町小校長秋山兵三郎が、

表1 学校・青年訓練所教職員の海外視察出張

年	視察地	人数
1927	南洋	3
	委任統治諸島	5
	朝鮮・満洲・沿海州	5
1928	朝鮮・支那	5
1929	朝鮮・支那	5
	欧米	1
1930	台湾	4
1931	朝鮮・支那	3
1932	満洲	1
1933	(なし)	
年	視察地	延人数
1934	朝鮮・支那・満洲	63
1935	朝鮮・満洲・支那	70
1936	朝鮮・満洲・支那	120
	欧米	160
1937	朝鮮・満洲・支那	63
1938	朝鮮・満洲・支那	42

注：『横浜市事務報告書』各年。視察地は資料の記述のまま。1年に複数あるものの並びは、実際の後先ではない。1934年以後は、注記がないものの延人数（参加人数×日数）と思われる。

二〇年一月一日から翌年七月二日までの約一〇か月、アメリカ・イギリス・フランス・イタリアなど欧米諸国を巡っている（『教育研究紀要』第一輯、横浜市役所、一九二二年）。

初期は主に欧米が目的地であったが、一九二六（大正一五）年度からは「必ずしも欧米と定めて一名を選ぶ必要はない」という市長の意見により（『横浜貿易新報』二七・一・二七、以下、横貿）、稲荷台小校長久芳龍蔵他二名が、香港・スラバヤ・シンガポール・上海など南洋方面に視察に行くことになった。翌年度には、日枝第一小校長渡辺市五郎他四名が、パラオ・トラックなどの委任統治領に、北方小校長猪瀬久三他四名が、朝鮮半島・満洲・沿海州へと赴いた。

ソ連領である沿海州への立ち入りについては、大使館との話し合いがつく前に出発とな

り、許可が下りたという電報をハル濱（ハルビン）において受け取る事態もあった（横貿二七・八・二四）。

その後は、朝鮮・中国・満洲が主な目的地となった。期日も南洋方面は二か月、朝鮮・中国大陸は一月ほどとなった。人数は、欧米行きで詳細がわかる一九二〇年度と二五年度は一人であるが、二六年度の南洋方面は三人となり、二七年度委任統治領と朝鮮・中国、二八年度・二九年度の朝鮮・中国は五人となり、三二年の予定記事では定員四名と書かれている（横貿三二・七・二六）。『横浜市事務報告書』に掲載されている学校・青年訓練所教職員出張の海外視察では（表1）、三二年は満洲方面に一人とあり、三三年は派遣されなかった。三四年以降、統計が延べ人数となり参加人数が分からないが、三〇五名が「朝鮮・満洲・支那」方面へ派遣されているようである。三六（昭和一一）年の欧米は、ロンドンで開かれた第七回世界教育会議にも出席した、浦島小校長の平戸喜太郎であろう（横



図1 関係地名・鉄道略図

賀三六・一〇・一七など)。これらの海外視察を命じられた者は、分かる範囲では総て学校長であった。

三九(昭和十四)年は、神奈川小校長亀住春吉他二名による朝鮮・満洲・関東州への派遣の予定記事があり(『読売新聞』三・七・七夕)、これとは別に神奈川県教育会が、中小学校長二〇名を派遣する予定で(同三九・八・三)、その中にも横浜市为学校長が含まれていた。翌四〇年は、県による興亜教育振興費による派遣が行われた(横賀四〇・七・三一)。

### 視察旅行へ出発する

安室晋治が、この視察に派遣される事が決まった期日は不明だが、最終的に市長決裁が下りたのは、出発まで一か月を切った、三七(昭和一二)年七月九日であった(『昭和十二年当用日記』、安室吉弥家資料六)。この年、安室は、四月に名古屋に出張し、会議の外、名古屋汎太平洋平和博覧会の見学や「ライン」見学、高山・下呂・養老などを廻り、伊東から下田へも赴いており(同)、長期出張は二度目であった。この出張の準備については、七月一二日に、一緒に視察に行く高橋林造の北方小へ打合せにいった日記記事が、はっきり分かる唯一であるが、校長として、たびたび市役所を訪れている中にもあったであろう。この間、七月二〇日に終業式が終わり、夏休み期間となった。

出発当日の様子は、次のように日記に記されている。但し、この日から帰宅の前日までは、安室ハルが日記を付けていたようである。

- 「七月三十一日 晴」
1. 此ノ日いよ／＼出発の日、午後八時四十二分発。
  2. 朝、床やに行き、市長に挨拶に高橋、蓑島、安室三人で十時に出かけ、午後は何かと整理にせわし。
  3. 六時夕食をすませ、湯に入り、七時青年会の人来ル、二十人、ビール、五分泰蔵、岡竹、渡部、春子、忠治、同乗見送る、自動三台、後より青年会の見送りにて、横浜駅に着、多数の見送りを受け元気で八時四十二分出発」

先ず、朝、床屋に出かけ散髪をして、一〇時に高橋林造・蓑島兵蔵と共に市長に挨拶に出かけている。昼からは、出発の準備などに忙しかったようである。夕方六時に夕食、風呂に入ったあと、七時に見送りの青年会などの人々が二〇人ほど来宅したのでビールなどを出し、七時一五分に見送りの家族と同乗して自動車で出発、青年会の人々も自動車で横浜駅まで見送りに来ている。駅には、他の校長の見送りの多数来ていたのである。午後八時四十二分発の列車に乗り出発している。

ノートに貼付された日程表によると、車中泊で翌一日午後六時〇〇分に下関着の予定であった。当

時の簡単な時刻表をみると(『昭和十二年八月現在 列車時刻表』安室吉弥家資料一五六〇)、八時四十二分発は普通の沼津行きで、下関六時着の急行(東京九時発、横浜九時三十分発)ではないので、沼津で乗り換えたのだろうか。下関からは自宅に酒を送っている(日記八月三日)。そして、いよいよ下関港から午後一〇時三〇分発の関釜連絡船に乗り釜山へ向かった。

### 朝鮮各地の視察

八月二日、午前六時に釜山に着き、七時五〇分発の列車で仏国寺へ向かった。仏国寺周辺は「朝鮮八景の一、(略)慶州仏国寺を中心として其の近郊に散在する陵墓・城趾・寺院堂塔等の遺跡と共に朝鮮遊覧には除くことの出来ない処となつてゐる」(『朝鮮旅行案内』朝鮮総督府鉄道局、一九三七年、安室吉弥家資料一七六一)と紹介される景勝地であった。現在は仏国寺・石窟庵は世界遺産となっている。仏国寺駅(写



写真2 仏国寺駅と慶州駅のスタンプ  
(安室吉弥家資料No.124)



写真4 不知火旅館支店と柴田旅館のタグ  
(安室吉弥家資料No.124)

真2駅スタンプ)に午前一〇時三十分に着き、この日は、先ず入場料三〇銭の仏国寺に見学に行き、その後、一円八〇銭の昼食をとっている。午後は入場料一五銭の石窟庵を見学し、一円五〇銭の記念撮影もしている(写真3)。また自動車代として一円五〇銭を消費している。その後、慶州駅(写真2駅スタンプ)へ移動し、市内見学に自動車代二円五〇銭を支払っている。夜は慶州の柴田旅館に宿泊し(写真4)、三人分一五円五〇銭、また一円で洗濯も頼んでいる。

翌三日は、慶州駅午前六時三十分発に乗り大邱駅(たてきょう)に向かい、そこから急行



写真3 石窟庵 中央が安室晋治  
(安室吉弥家資料No.124)



写真5 列車食堂の案内  
(安室吉弥家資料No.124)



写真6 絵葉書 朝鮮総督府博物館 同館のスタンプが押してある  
(安室吉弥家資料No.1562)

八月七日は、京城駅を午前七時三〇分に出発し平壤に向かった。平壤駅（写真8駅スタンプ）には二時三〇分着、そのまま市街見物に出かけている。平壤は「人口十八万余を擁する西鮮一の大都会で大同江の流域地方は豊饒な

る農産物と石炭を産し地の利を得て附近には大工場簇出し一大工業地帯を現出している。〔略〕観光都市としての平壤は朝鮮古代史を飾る檀君・箕子・楽浪・高句麗の遺蹟、文祿・日清の戦跡等の名所旧蹟に富み」（『朝鮮旅行案内』）と紹介されている。翌八日には留守宅に次のような葉書を送っている（ノートに貼付）。「元氣

内」。また、本来八日の予定は、平壤から安東經由で奉天へ行くはずであった。しかし、南滿洲鉄道安奉線（安東—蘇家屯で連京線に繋がって奉天へ）が不通のため、予定通りとは行かず、飛行機の便もあつたが雨で飛ばなかつたようである。そのため、鎮南浦へ足を伸ばしている。

五日は、午前十一時四五分発の列車で鉄原駅に向かい（午後四時一〇分着）、四時二八分発の金剛山電気鉄道に乗り換えて内金剛山に九時三五分着、不知火旅館支店（写真3）に宿泊した。金剛山は「江原道の北方海岸に近く高城・淮陽の二都に跨る広袤約百平方料に及ぶ山域一帯を称し、古来万二千峰の称ある程多数の奇峰峻嶺から成立つてゐる。そして互に錯綜して形造る溪谷は数限りなく急峻絶壁の万態を現はし、其の山岳美は世界的に知られてゐる」（『朝鮮旅行案内』）という景勝地である。写真7の金子常光の鳥瞰図でも、多くの峰がある様子が描かれている。翌六日の午前中は内金剛を見学し、食事の後、午後一時二〇分発の電車で鉄原へ戻り、午後七時一五分の列車に乗り換え京城に戻り、村上旅館に宿泊した。

鎮南浦は、日清戦争時に日本軍の艦隊停泊地・兵站基地となり、「〔略〕近時築港も竣成して一万噸級の巨船が築々と出入碇繋することの出来る設備を有する」港湾都市となり、「輸移出入品の大部分は米穀で占め、大同載寧両江の流域に跨る沃野より産出する農産は此地を中心として取引せられてゐる」、また、「郊外大代面大頭里に在る日本

る農産物と石炭を産し地の利を得て附近には大工場簇出し一大工業地帯を現出している。〔略〕観光都市としての平壤は朝鮮古代史を飾る檀君・箕子・楽浪・高句麗の遺蹟、文祿・日清の戦跡等の名所旧蹟に富み」（『朝鮮旅行案内』）と紹介されている。翌八日には留守宅に次のような葉書を送っている（ノートに貼付）。「元氣

列車で京城へ向かった。この列車の中で食堂車を利用して昼食を取っている。写真5は、日時は不明だが朝鮮鉄道の列車食堂の案内である。京城駅には午後一時三〇分に着、二時二〇分の列車で港町仁川へ見学に向かい、京城駅には五時一〇分に戻ってきている。宿泊は不知火旅館の予定であつた。翌四日は、終日京城を視察している。京城は、李氏朝鮮が首都とした漢城、現在のソウルであり、人口六七万人の都市であつた。午前は朝鮮総督府を訪問し、午後は総督府博物館（写真6）などを見学したものとされる。



写真7 金剛山付近鳥瞰図 『朝鮮』(朝鮮総督府)1931年、部分  
(安室吉弥家資料No.1562挟み込み)

る農産物と石炭を産し地の利を得て附近には大工場簇出し一大工業地帯を現出している。〔略〕観光都市としての平壤は朝鮮古代史を飾る檀君・箕子・楽浪・高句麗の遺蹟、文祿・日清の戦跡等の名所旧蹟に富み」（『朝鮮旅行案内』）と紹介されている。翌八日には留守宅に次のような葉書を送っている（ノートに貼付）。「元氣



写真8 平壤駅スタンプ  
(安室吉弥家資料No.124)

る農産物と石炭を産し地の利を得て附近には大工場簇出し一大工業地帯を現出している。〔略〕観光都市としての平壤は朝鮮古代史を飾る檀君・箕子・楽浪・高句麗の遺蹟、文祿・日清の戦跡等の名所旧蹟に富み」（『朝鮮旅行案内』）と紹介されている。翌八日には留守宅に次のような葉書を送っている（ノートに貼付）。「元氣



写真9 絵葉書 平壤牡丹台博物館 スタンプが押されている  
(安室吉弥家資料No.1562)



写真10 絵葉書 日本製粉鎮南浦工場 鎮南浦駅のスタンプが押されている (安室吉弥家資料No.1562)



写真11 絵葉書 撫順龍鳳坑 撫順駅のスタンプが押されている (安室吉弥家資料No.1573)



写真12 絵葉書 新京郊外南嶺戦跡記念碑 参拝記念のスタンプが押されている (安室吉弥家資料No.1573)

興業株式会社鎮南浦製錬所（元久原製錬所）は「略」近時金輸出再禁と共に産金熱旺盛の為昔日の活況を呈してきた」などと紹介されている（『平壤昭和拾壹年版』朝鮮総督府鉄道局、安室吉弥家資料一七六一）。一行は港湾や市街だけでなく、鎮南浦製錬所も見学している。九日も平壤市街を見物して、ようやく午後八時四三分発の列車に乗り安東經由で奉天へ向かった。安奉線の不通により、この後の予定を大きく変更することになる。この間の桜旅館三人二泊は、二九円九五銭であった。

### 満洲の視察

奉天には一〇日午前一一時に到着した。奉天は人口約四六万人の満洲の主要都市である。昼食後、午後は奉天市

内を見学している。ノートには、奉天教育庁の組織や章煥章庁長など役職者の名前や学校名、また奉天教育研究所石川七五三二などに宛てた紹介名刺（白幡小校長長谷川雷助）が残っている。夜は大丸旅館に宿泊している。翌一日は、午前七時三〇分の列車で撫順へ向かっている（九時七分着）。撫順は、露天掘りなどで著名な巨大炭鉱の町で、日本にとって重要な拠点の一つであった（写真11）。現地の日本陸軍の守備隊へも訪問しており、「撫順木越部隊副官」の名刺が残っている（ノート貼付）。その後、撫順駅発午後二時一〇分の列車で奉天に戻った後、午後六時一〇分発の列車で新京へ向かい（一時四〇分着）、愛国ホテルに宿泊した。新京は、もとは長春であり、「満洲国」

創建と共に首都とされた人口約一八万人の都市である。

一二日は、新京市内を見学した後、午前一〇時四〇分発で吉林に向かい（午後一時一五分着）、吉林を見学し、新京に戻り宿泊している。翌二三日も新京市内を見学し、若干離れた満洲事変の激戦地の南嶺などにも足を運んでいるようである。参拝記念のスタンプを押した絵葉書が残っている（写真12）。新京では「文教部ヲ訪問、御陰様ニテ新興満洲国ノ教育状況ヲ精細ニ」視察した旨の手紙文を記している。また、奉天の南満中学校、青年学校、新京の小学校、大連の第二中学校に宛てて、安奉線が不通であったために訪問できない旨を通知している（安室一二四）。奉天は既に通って来ているが、予定では一四日に二時間弱の滞在予定があった。その後、午後四時五八分発の列車で哈爾濱に向かっている（午後九時一四分着）。哈爾濱では富久屋旅館に宿泊した。一四日は、哈爾濱見学に費

やしている。他の都市同様に教育機関や、写真13にみるように日露戦争跡なども見学している。本来の予定では、一四日に哈爾濱を出て、新京・奉天を経由して、温泉地である湯崗子に宿泊する予定



写真13 哈爾濱の志士之碑 手前中央が安室晋治(安室吉弥家資料No.1562)



写真14 満鉄あじあ号のステッカーと大連亜細亜ホテルのタグ (安室吉弥家資料No.124)



写真15 旅順水師管會見所跡 晋治 向かって左から2番目が安室 (安室吉弥家資料No.124)

定であったが、翌一五日、哈爾濱午前一〇時発で大連に向かっている。南満洲鉄道の特急「あじあ号」(写真14ステッカー)に乗ったようである。大連には午後一〇時四〇分に到着し、亜細亜ホテルに宿泊している(写真14)。大連と翌日に訪問する旅順は、遼東半島先端にある日本の租借地である。

翌一六日は、午前九時に出発して終日旅順を見学している。二〇三高地(爾靈山)や水師管會見所跡(写真15)などの日露戦争の戦跡や、旅順博物館なども巡ったものと思われる。一七日は、終日、大連市内を見学しており、大連神社や沙河口神社のスタンプ入り絵葉書、福昌華工株式会社経営している苦力の収容施設「碧山荘」のパンフレットが残っている(安室吉弥家資料一五七三、一七六五)。また、「大・小七箇

ここで南満洲鉄道の食堂車の案内を紹介しよう。安室晋治のノートには、九枚の案内が貼付されている(写真16、「領収書」写真17)。



写真17 南満洲鉄道の食堂車の領収書 (安室吉弥家資料No.124)



写真16 南満洲鉄道の食堂車の案内(安室吉弥家資料No.124)

の広場を中心に、舗装された多数の道路は蜘蛛網状に八方に放射し、街路にはすべて煉瓦造りの宏壮な建築が立ち並び、極めて清潔」(『朝鮮満洲旅行案内』と評された町並みも見学したのであろう。

食だけでなく、一品料理やお茶の時間にはアイスクリーム・冷たい飲み物などの案内もあった。

予定では、一七日に、大連から船に乗り門司に着く筈であったが、予定変更により、大連一七日午後一〇時二〇分発で蘇家屯・平壤・新京を経由し釜山に一九日午後六時三〇分に着き、午後一〇時三〇分の関釜連絡船に乗船、翌二〇日朝七時一五分に下関到着、八時五〇分発の寝台急行に乗り、二一日朝、六時二〇分に横浜駅に到着した。

帰宅後のこと

横浜駅に六時二〇分に到着した安室晋治は、自宅に八時に帰宅した。「1. 朝八時満洲ヨリ帰宅。2. 一日中整理ニ忙シイ」二一日の日記にこの様に記している安室は、メモや絵葉書などの整理に忙しかったであろう。写真18の絵葉書帳二冊には、掲出したもの以外にも各地の絵葉書が整理されている。

二四日には、家族が土産物を親戚などの人達に持参している。出発の際に見送りに来た青年会などの人々には、九月に札状と記念品として灰皿を贈った(何故か案内には二四日帰浜したとなっている)。八月残りの夏休み期間を過ごした安室晋治は、九月一日、始業式に臨んでいる。

この視察旅行が行われた三七(昭和一二)年八月は、七月の盧溝橋事件から日中の戦闘が始まっていた時期である。新聞では、連日、戦争のニュース



写真18 整理された絵葉書 (安室吉弥家資料No.1562、1573)

が大きく報道されていた。地元からの書簡には「日支ノ関係モ今処頗ル平静ノ状態デアリマスノカ最近要員ノ召集モアリマセンガ、御視察ハルビン方面ハ砲煙ノ火中ニアルコト故充分ニ御注意ガ肝要デ御座イマス」(八月六日発、北見玉吉書簡、ノート貼付)とあった。視察の細かい状況が分からないこともあるが、ノートからは戦争の影響が余り感じられない。

【参考文献】

- 『横浜市学校沿革誌』(横浜市教育委員会、一九五七年)、『日本鉄道旅行地図帳「朝鮮台湾」』(同「満洲樺太」(新潮社、二〇〇九年)、以下、国立国会図書館近代デジタルライブラリー)、『朝鮮鉄道状況』第二九回(朝鮮総督府鉄道局、一九三八年)、『朝鮮満洲旅行案内』(三省堂、一九三六年)。